

2021

5

令和3年5月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻333号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さあ、言おう



さわやか福祉財団

2021年5月号

さあ、言おう

「思恩忌」春を 執り行いました



最初のご遺贈者・
故山路鈴子さん



これまで当財団の理念と活動に共感いただき、遺贈ご寄付をお寄せくださった方々を偲び、3月23日のブロック全国協働戦略会議の場で、「**思恩忌**」春を執り行いました。

当日は、会場ホワイエにお一人ずつの似顔絵とメッセージを展示。参加者全員で「アメイジング・グレイス」を合唱して感謝の思いを捧げました。 ※巻頭言もご覧ください。



右・清水理事長

手前・堀田会長。参加者全員で
「アメイジング・グレイス」を合唱

さあ、言おう

2021年5月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

遺贈ご寄付への感謝を込めて「思恩忌」春 清水 肇子

4 連載 厨房男子 聞き手・堀田 力

理系男子の料理哲学 中村 安宏さん

12 さわやか福祉財団の軌跡 真っ直ぐに、30年

寄稿2 清水さんのこと

—しなやかさの裏に熱い思いで、財団を牽引—

さわやか福祉財団理事 丹 直秀

20 移住 悪くないですよ 第6回

何があっても生きていける力

阿部 幹司さん・幸子さん（宮城県栗原市）

30 連載 4 老いの暮らしを創る

早めの引っ越し① 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

34 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

41 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

43 NEWS & にゅーす

48 さわやか活動日記（抄）

①「NEXT動画」のご紹介

②「地域助け合い基金」助成先のご紹介

③「地域助け合い基金」状況のご報告

④さわやか書棚

⑤『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介

⑥みんなの広場 / 投稿募集

⑦さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 大日向 雅美

遺贈ご寄付への感謝を込めて

「思恩忌」春

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

「財団の、無欲で尽くすところを主人が気に入ったのです」

「気取らずに助け合う街を広めてね」

「助け合いはとても大切なものです。ぜひ全国に広めてください」

これらは、さわやか福祉財団に遺贈ご寄付をくださった方の生前のお気持ちで、冒頭から故沢村貞子さん、故齋藤規子さん、故橋本武義さんの言葉をご紹介させていただいた。

これまで当財団にいただいた遺贈ご寄付「ふれあい遺贈基金」は30を数える。当財団は新しいふれあい社会づくりを理念に30年活動してきているが、いわば縁の下の目に見えない取り組みだ。そうした地道な活動に、絶対必要だから応援しますと、こんなにも共感してくださる方々がいらっしゃる。それが本当にありがたく、私たちの活動の大きな支えとなっている。貴重な資産を活用させていただき、何よりもそのお気持ちを力に活動させていただいている心からの感謝の思いを込めて、この度、〃「思恩忌」春〃^{しおんき}を執り行った。

「思恩忌」は、これまで夏に財団事務所で行ってきたが、それに加えてさらに少しでも広く皆様にご紹介する機会をと企画したもの。今回は全国のさわやかインストラクターや生活支

援コーディネーター等の皆さんとの全国会議に併せて実施させていただいた。

コロナ下のため、会議はオンラインを中心に開催し、会場参加者は約40名ほどだったが、休憩時間に皆さん掲示された資料を手にとってじっくり読んでくださるなど、大きな反響をいただいた。お一人ずつ作成した似顔絵もコルク素材をベースにしたもので、とても温かみがあると大好評。作者は、小熊哲生さん。本誌に毎号表紙絵を提供いただいている池田げんえいさんからご紹介いただいた。まさにこれもつながりのご縁だ。また、展示だけでなく、「アメイジング・グレイス」の合唱も行っている。当日の様子は追ってホームページでもご紹介するので、ぜひ多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

ちなみに、冒頭ご紹介した故齋藤さんも故橋本さんも、「不動産も含めて遺贈を受けてくれる信頼できる公益団体」をお考えの中で、当財団の活動と理念に深く共感くださり、公正証書遺言を残してくださいました。当財団のご遺贈の特長に、お名前を冠する基金と、この不動産の受け入れがある。不動産については消極的な公益団体が多い中、私たちはせっかくのお気持ちをも何とか社会につながる役目を果たせないかという思いで、売却を前提に、流動性の高いもののはできる限り受け入れをすすめている。確かに不動産の取り扱いには税金面も含めて複雑で、実際の手間もかかる。それを可能にしてくれているのが、日頃から同じ思いを共有してくださっている弁護士・税理士等の方々の存在であり、また、企業時代の経験を生かして丁寧に取り組んでくれているボランティア職員の地道な取り組みがあつてこそ、といえる。

まだ数十年にわたって解決を目指していかねばいけない問題は日本に山積している。『思いをお預かりし、共に未来へ』。ぜひこれからも皆さんと一緒に頑張っていきたい。



厨房男子

聞き手
堀田 力

連載

理系男子の料理哲学

中村 安宏さん

□ 会社人間の家族愛

戦時中に生まれ、応用化学を学んで技術屋さんとなった中村安宏さんは、典型的な会社人間。昭和60年頃のある年末、妻の恭子さんが聞いた。「あなた、今年1年間で丸1日全く会社の仕事をしなかった日が何日あったと思う?」

「15日から20日くらいかな」

「よく言いましたね。大晦日とお正月の3日を除くと、3日間」

それくらいの会社人間で、娘さんのエレクト

1んの発表
会や父親参
観日に出て、
終わったら

とんぼ帰り

で得意先の

工場へなどというのは当たり前。朝は6時に家を出て、月の3分の1は帰宅が真夜中近くになったことも。娘さんから、

「お父さん、生きとったん」と言われたこともあった。



それでも2人の娘さんが寝る時間に間に合えば童話と自然科学の話をするしきたりは守っていて、就寝時間である9時前に頑張って帰ると、娘さんたちが「今日のお話は3日分よ」などとせがむ。童話を3つ、虫や魚や星の話を3つ、端折って30分ほどで娘さんたちは安らかな眠りについた。

■家事2分割の提案

会社人間の中村さんが、60歳過ぎで会社をリタイアすると、恭子さんが真剣な面持ちで言った。

「これまではあなたが外で働いて、私は育児や料理やお掃除など家のことをやってきたけど、これからはあなたは外で働かなくてよくなるのだから、料理と掃除は半分ずつしましょう」

理系の人間だから理にかなった提案はもちろん受け入れる。そしてやるとなったら、きっちり分けないと気が済まない。協議の上、火曜と木曜、金曜は中村さんの当番と決まった。当番

に連続する日を設けたのは、当番日が連続していると、買い置き、つくり置きがきくからだという。

タンパク源となるお肉と魚を日替わりにし、日曜日の昼食はカレーライスなど、メニューを考える必要のないものと決めた。

「人は私のことを頑固者と言ってるらしいですけどね、私は決めたことはなるべくきちんとやりたい性分ですが、飲み会など私用ができると妻に当番を代わってもらいます。例えば木曜日と日曜日を交換してもらいます」

ある時、隔週金曜の調理ボランティアに出かけようとした時、恭子さんが、

「あなた金曜担当なのに、私はお昼、何を食べたらいいの？」と聞くので、

「ボクは毎週土曜日ボランティアに行くからさ、あなたオレの昼食つくらなくていいでしょ」と返したそう。

分割ルールがないと成り立たない愛の会話である。

□ 食いしん坊だから

彼はどのようにして料理を覚えたのか。

「ボクは食いしん坊だから、子どもの頃から見よう見まねで覚えたのです」

サラリーマンの家庭の長男に生まれ、戦後の食糧不足の時代に育った。

空腹で台所をウロウロしていると、見かねた母があり合わせの食材で食べる物をつくってくれたが、出来上がるのが待ち遠しくてそれをしつかりと観察していた。そこで少年は早くも、そこにある材料で、いかに早く、美味しいものをつくるかの方策を学んでいる。

小学4年頃になると、早く食べたいばかりに母親の料理を手伝うようになり、卵焼き、カレー、野菜炒め、チャーハンなどは1人でつくれるようになった。

そして、モダンな考え方の父母がデートで外出する時などは、妹、弟の分を含めて、食事づくりを引き受けた。

少年らしい誇らしい気持ちも少しあって、米研ぎからやった。

筆者も、戦時中の小学4年で薪代わりの雑草拾いから一家の釜の飯を炊き上げるまでを1人で担当していたから、気持ちはわかるような気がした。

当時は氷の冷蔵庫で、材料の足は早い。少年は「食べる物には必ず火を通しなさい」と母から言われていた。

食材は、古新聞とか筍の皮などに包んで保存されていたから、食事をつくるため包装を開ける時、何が入っているのだろうとワクワクしたという。そして、出てきた食材を見て、「これでどんなものをつくろうか」と考えるのが楽しみで、思ったものに近い料理が出来るとうれしくて、ますます料理が好きになった。

「面白くなってくると、頭がもつと働くようになるのですよね」。料理は頭の訓練になるとすれば、ボケ防止にもなるのは間違いない。

□ 家庭料理とは

すでに小学生時代に料理に対する考え方を獲得すると、大学時代には自炊する中で常温の保存可能な常備品のつくり方を身に付けた。会社人間時代にも、娘たちにねだられた時にそれぞれの口に合う簡単な料理をやったりしている。

それらの長い経験の積み重ねがあつて家事2分割の提案を受け入れ、以後15年以上実践を重ねてきているのであるが、家庭料理については一家言ある。

筆者がかつて曾野綾子さんの夫である亡三浦朱門さんに、

「堀田さん、男の料理はね、レシピを見て必要な食料をリストにし、それを買いきろえて調理しますよね、しかし、それではダメなんですよ。冷蔵庫を開けてね、そこにあるものでサツとつくる。私はその域に達していますね」

と自慢されたことを語ると、中村さんは我が意を得たりと、

「家庭料理というものはそういうものと思っています。記念日とか祭りの時などにつくるハレの料理は、レシピがあつて食材をそろえ、調理します。だけど、家庭料理は、あるものの勝負で、食べる人の口に合うものをつくる。そこが頭の使いどころで、楽しいところです。食べた人が美味しいと言ってくれば、うれしさは倍増します」

□ 調理ボラの楽しみ

退職して2年ほど経った頃、近所を歩いていると、「社会福祉法人ふきのとうの会」の調理ボランティア募集のポスターが目に入った。

ふきのとうは、東京都世田谷区で活躍する日本の代表的な配食サービス団体で、現代表の平野覚治さんの母である平野眞佐子さんが1983年に始められ、「地域はひとつの家族」を旗印に、配食を中心とする地域の絆づくりを進めてきており、国際的にも名を馳せている。

「これなら外に出る機会も得られるし」という

ところが、気を引かれた第一印象だった。
「調理補助ならなんとか熟せるだろう」「人見知りが強くて、世間話は苦手だが、調理を手伝ってあげれば、聞こえないふりもできるだろう」と計算する一方で、「ボランティアの多くは主婦だろうから、教わりながらボチボチ慣れていけばいい。小さな輪の中でのコミュニケーションはあるだろうし」と期待したこともある。退職して社会とのつながりがほとんどなくなった中で、「社会貢献している気分が得られるのも悪くない」と思ったことも、背中を押した。

□ 調理ボランティア16年

それから16年、毎週土曜と隔週金曜にふきのとうで料理をつくってきた。

彼より少し後にふきのとうの職員になられた佐野有未さんによれば、

「中村さんは、女性のボランティアが多い中で、あまりお話しはされず、黙々と調理をされていますが、なんとなく、チームの中心として味見

を引き受けてたり、みんなから頼りにされていてますね。あまり口は出されないので、時々すご

く面白いことを言ったりして、女性陣の人気を集めてられます」とのこと。

彼にこれまでボランティアが続いた理由を聞くと、その第一が、

「皆さんが比較的黙々と調理をしていて、コミュニケーションの苦痛が少ないし、休憩時や昼食時は和気藹々の雰囲気があって楽しいし」ということで、応募した時の希望が満たされている喜びが感じられた。



毎週土曜日はデイサービス3拠点の利用者等120人分の昼食を用意。利用者さんの食欲がわくような献立説明の工夫を欠かさない中村さん

調理ボランティアの心がけや喜びを聞くと、答えはすぐ返ってきた。

「誰のためにつくっているかということをしつかり認識することです。ここ（ふきのとう）の場合、相手はお年寄りですからね。食べやすい大きさに切ることなど、近所に住んでおられる方が多く、毎日の料理が大変とか、自分ではつくれない方々ですから、ぜいたくなものをつくるより、口にして美味しいものを、レシピを工夫したり、旬のものを加えたりして提供しています。

食べた方から返ってきたメモに、『かぼちゃの煮付けがおいしかった』などとあると、工夫した甲斐がありますよね」

□ 恭子さんのアレルギー

「やっぱり人間、やることがあるというのは大事なことです」

そう言って、娘さんたちが巣立ったあと、夫婦2人の生活を楽しんでいたが、1年半ほど前

から恭子さんに大豆アレルギーが始めて、味噌も醤油も使えなくなった。

「味噌も醤油もダメとなると、つくれるものがグッと限られますがね」。そう言ってハワかなVという顔でこちらをうかがってから、むしろ楽しそうに、

「だけど、そこらが智恵の出どころですよ。いろいろ工夫してやっています」

分割のローテーションも変えず、従来通りの生活様式を守っているという。

うす味好きの恭子さんと濃い味好きの中村さんが味の折り合いをつける話などを伺いながら、改めて彼が大変な家族愛の持ち主だということを確認させられた。

□ 最後に、男の料理

「料理ってね、身構えてやるものじゃないでしょう。料理は食材を食べられるようにするもので、それが美味しく出来れば上々だと思っただけです」と言う。

「自分の好きなものを好きな形にして食べるのは、楽しいものです。卵焼きだってカレーだって。そして、自分が満足できる料理の数が増えてくると、大いに自信が付きます」

自分で世間話は苦手だと言っているが、料理の話を始めると止まらない。自信を持つことは、人と交わって生きていくうえで、とても大切なことだと実感する。

「包丁を持って野菜や肉を切ったこと、ガスを使ったことがあったら、先ず始めましょう」と、呼びかけの言葉は熱かった。

* * *

ふきのとうの平野代表に中村さんのことを伺うと、

「いやあ、中村さんの存在は、うちにとっても大きいですよ」

ふきのとうの調理ボランティアは100名ほどであるが、そのうち男性は1割ほど。男性の多くは、配達ボランティアの方に回ってしまうそう。

「味付けや料理の選択、組み合わせにしろ、調理をチームで進めていくプロセスにしろ、やっぱり男性と女性の両方がいる方が、食べる人により喜ばれるものができるし、ものごとにもスムーズに進みます。

雰囲気も、グッとよくなりますし、ね。

年齢も、ばらけている方がよい。

世の中、多様な人が暮らしているんだから、料理も多様な人々のチームでつくることが大切じゃないでしょうか」

男性も、もちろん共同参加する時代になっているのである。



右から中村さん、ふきのとうの平野代表、佐野さん

大好評

動画『NEXT ~心と心をつなぐ工夫と取り組み~』

ご活用ください！

コロナ禍にあっても、アイデアと工夫でみんなが笑顔になれる活動を紹介している当財団制作の動画「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」（各8分程度）。皆様から大変ご好評いただいています。コロナの時代における助け合い活動のヒントとして、生活支援コーディネーターの勉強会のツールなどとして、ぜひご活用ください！

NEXT

心と心をつなぐ工夫と取り組み



第1弾

奈良県生駒市



あなたの「元気」を届けよう
プロジェクト

第2弾

静岡県袋井市



出前居場所・青空居場所・
我が家のごはん届けます

第3弾

大阪府門真市



こんな時こそ地域の力で、
ゆめ伴プロジェクト

第4弾

新潟県新潟市



受け身にせず
「みんなで守ること」で活動再開

第5弾

岡山県倉敷市



つながる回覧・
マスクプロジェクト

第6弾

神奈川県鎌倉市



食を通じた居場所（みんなたべ）・
フードパントリー

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/movie-next/>

真っ直ぐに、30年

寄稿2

清水さんのこと

——しなやかさの裏に熱い思いで、財団を牽引——

さわやか福祉財団理事
丹 直 秀

今秋30周年を迎えるさわやか福祉財団の軌跡を、人を中心にしながらご紹介するシリーズの第2回です。前号の堀田力会長に続き、今号は、清水肇子理事長に焦点を当てながらこれまでの活動を振り返ります。

(編集部)



財団事務所ビル外観。
1996年に移転して四半世紀が経つ

「働き方改革」と 「男女共同参画」の先駆者として

新緑の5月、コロナ禍の中でも季節は着実にめぐり、人の心をさわやかにしてくれます。その中でこの4月から法律が改まり、定年の原則が70歳までとなりました。遅まきながら、人生100年時代への布石です。すでに芽生えている働き方改革の促進剤にもなるでしょう。このような日本社会の動きを先取りして30年前の1992年、さわやか福祉財団（当時は「さわやか福祉推進センター」）へ飛び込んだのが清水肇子さん（以下、清水さん）でした。当時の清水さんは、大学卒業後大手金融機関へ就職し、管理職に昇進後独立、キャリアコンサルタントとして活躍中の身でした。それだけに、定年前に法務省官房長を辞して独立し、91年にさわやか福祉推進センターを創った堀田さんの動きと理念には深い共

感を覚えたものと思われます。

誰もが自分を生かせる新しい社会の枠組みをつくるために、企業や大学をはじめ就職や定年のあり方など、まさに今でいう働き方改革を現場レベルで実践し始めた時期が、ちょうどさわやか福祉推進センターの創立と重なっていました。「何かお役に立てることがあればと、ボランティアとして押しかけました」と笑って当時を振り返ってくれました。もちろん、フリーのコンサルタントもしなごらの活動で、これも今でいう複役社会のまさに走りといえます。

私（丹）が60歳で企業を定年退職し、同時にボランティアスタッフとしてさわやか福祉財団へ参加したのが96年。清水さんはすでに4年を経て、乞われて有給の職員の立場も持ちながら、堀田さんを支えつつ、月刊情報誌『さあ、言おう』の編集長として活動中でした。典型的な会社社人として生きてきた私か

ら見ると、清水さんをはじめとする女性陣が大活躍しているさわやか福祉財団、そして、さわやか福祉財団が広げようとしているボランティアの人たち、とりわけ、暮らしに欠かせない生活支援を担っている全国各地のボランティア団体のリーダーやその活動を支援するさわやかインストラクターの人たちは、多くが女性であり、暮らしの現場を支える女性の力を改めて痛感させられたものでした。

今日日本で強く求められている大きなテーマが「働き方改革」と「男女共同参画」。これを時代に先駆けて実践してきたのが清水さんであり、さわやか福祉財団であったといえるでしょう。設立から30年を経て、堀田さん、清水さんのような生き方、あるいは働き方が多くの人に求められる時代になってきました。その清水さんが今は理事長。もちろんそれまでには山あり谷ありで、平坦な道ではなかったと思います。清水さんが取り組んだ多く

の課題や活動の中から、私なりに印象に残るものをいくつか挙げてみます。

1 情報誌『さあ、言おう』の編集長として (1992年～2014年)

「あなたには情報誌をやってほしいんです」。清水さんが、92年に初対面の堀田さんから、まず言われたのがこの言葉だったとのこと。堀田さんが目指すさわやか福祉財団の姿は、新しいふれあい社会づくりのための「情報発信センター」であり、設立当時その基本となる大切な役割を担う情報誌を任せられたというところに堀田さんからの期待がうかがえます。

堀田さんは『さあ、言おう』というネーミングとその目指す方針は明確に伝えつつ、あとは清水さんが企画編集から取材や原稿執筆まで統括しながら、様々な人を巻き込んで月刊誌として共に作り上げてきました。しかし、

私が参加した当時のさわやか福祉財団は、95年、どうにか財団法人として法人化は実現したものの、バブル崩壊後の社会情勢もあって「貧乏神に取りつかれて」おり（私と同時にボランティア参加した故高野芳夫さんの言）、月刊情報誌の発行もままならないような財政状況です。合併号で凌いだりしながらなんとか情報発信を続けていました。

一方、

財団全体では、そのような厳しい環境の中でも財団の理念の実現へ向け、一般の方のほか、



左・創刊準備号（1992年）と
右・創刊号（1993年）。表紙絵とタイトルロゴも
池田げんえいさん作成でずっと変わらない

勤労者や学生等へ焦点を絞ったボランティアの普及、さらには有償ボランティア団体の立ち上げ研修等の様々な具体策を積極的に展開しており、また、阪神・淡路大震災支援など、情報誌の編集という枠を超えて、全体に目配りする役割も担っていた清水さんの苦労は並大抵のものではありませんでした。このような難局を乗り越え、『さあ、言おう』の発行も軌道に乗ってきた後、清水さんを待っていたのは財団の要となる事務局長の職でした。

2 事務局長として…内部固めと公益法人化

（2003年～2014年）

さわやか福祉財団には、いわゆる稟議書（ハンコ決裁の仕組み）がありません。これも昨今の国の動きを先取りしていますが、諮ることが必要な個々の事案の承認や意思決定は職員皆が参加できる定例の会議で行ってきました。フラットな組織運営を重視する堀田

さんの考えによるもので、いわば開かれた合議制による決裁であり、その内容は議事録に残します。閉ざされた稟議より適切な判断が担保できるという意味があります。ただ、合意を得るまでのプロセスには手間がかかります。まして、皆がいろいろな「思い」を持っ

て集まっている組織ですから、まとめ役として組織運営にはずいぶん神経を使うこととなります。03年から事務局長となつた清水さんは、このような独特の内部運営に配慮し



定例会議風景。左端奥から清水さんと堀田さん（2004年当時）

つつ、次の大きな課題である、財団の公益法人化に取り組むこととなりました。

10年4月、さわか福祉財団は、内閣府の認定を受けて「公益財団法人」となりました。その結果、それまでの「財団法人」の場合と異なり、会員や寄付者の皆様には、一定の条件で会費や寄付が税制優遇の対象となり、節税できるメリットが受けられるようになりました。

税制を含む公益法人改革については、そもそも当財団として、当時の堀田理事長が強力にあるべき姿を国に対して提言してきた問題でした。自組織の移行にあたっても、単なる認定ではなく、「これから公益法人を目指す団体のモデルとなるような公益財団法人をつくりたい」というのが堀田さんの思いです。その理想と、当時の主務官庁（文部科学省と厚生労働省）、認定事務局となる内閣府（公益認定等委員会）の間に立って、大変な量の

書類づくりや折衝努力を重ねたのが清水さんでした。さわやかの目指す高い理念を、保守的な国の制度とどのように調和させ、理念へ近づけていくかは、財団誕生のときからの課題です。民間公益活動として自分たちの自主・自律性をどう訴えていくのか。その最も厳しい局面を直接担当したのが当時事務局長であった清水さんでした。

また、偶々この時期、堀田さんが、自身の転身とさわやかのこれまでの活動を振り返り、日々寄稿する半年にわたる新聞連載がありました。清水さんは財団の立場から原稿内容を逐次確認し、その後書籍にまとめて発行するまでの編集も担うこととなります。全国の皆さんへの広報としても、財団の活動をしっかりと伝えたいという思いで、事務局長や編集長としてその他の業務も変わらずに抱えている中、まさに連日超多忙を厭うことなく、その業務をこなしていました。

3 理事長として…遺贈で財政の基盤づくり (2014年～現在)

さわやか福祉財団の活動は、全国の皆様からのご寄付によって支えられています。また、多くの方が遺贈の対象としてさわやか福祉財団を指定してくださっていることも本当にありがたいことです。財政面でも国の支援に頼らず、貧乏神に取りつかれながらも自立した運営を貫く堀田さんの理念と活動内容に共感してくれた皆さんのお気持ちは、何よりも活動の励みになります。

ただ手続き上、不動産物件の遺贈には様々な課題が多く、その処理には特に神経を使いますので受理しない団体が多いのですが、当財団では十分お話し合いの上、活用させていただく例が多くあります。清水さんは、事務局長時代から高野芳夫さんをはじめとする財務グループの人たちと連携し、外へのアプローチから中を固めるまで、このような当財団

独特の遺贈活用基礎をつくってきました。

代表的な例が故齋籐規子さんによる遺贈です。金融資産や美術品のほかに、大変多くの土地・建物を生前寄付及び遺贈として頂戴しました。その経緯は、本誌でも「寄付・遺贈のころ」シリーズで紹介していますが（2019年1月号）、生前のご寄付のあと、さらにありがたいことに遺贈の意思表示を具体的にいただいてから、逝去されるまでの数年間、財団側の窓口としてオーナー経営者でもある齋籐さんの信頼を深く固めていったのが清水さんでした。齋籐さんの思いを受けて、最期の時は未明にタクシーで駆けつけたと後で知りました。

遺贈者のお一人、18年に96歳で逝去された故國吉蓮子さんのお宅を、亡くなる数年前に清水さんと共に訪問したことがあります。遺贈の対象としたものの、納得のいくような活動を続けてくれているかは、遺贈者ご本人

にとつては一番気がかりなところでしょう。

90歳を超えてお一人暮らしを続けながら、幅広い関心を持たれてい

る多趣味な國吉さん。そのお話に合わせながら、さりげなくさわやかな近況を誠実に伝える清水さんを見て、さわやかから貧乏神が逃げていった理由が分かったような気がしたものです。大きな存在の堀田さんから受け取った理事長のバトンは、清水さんにとって、さぞ重く感じられたことでしょう。ただ、堀田さんの大きな理念を、多くの一般市民にないでいく役割は大変難しさもあり、誰にでも



美容師だった故國吉さん（右）と清水さん。
倭約家でもある國吉さんは、いつもおしゃれに
お手製の洋服を着こなされていた

できるというものではありません。國吉さん宅で垣間見たような清水さんの活動は、幅広い理事長の仕事のごく一部ではあるでしょうが、特にこれからの財団の財政基盤づくりには大変貴重なものと感じられました。

4 しなやかに、 そして「さわやか丸」のこれから

お酒もかつてはすごくいける口でしたが、血栓の病気をしてそこはほどほどに封印のようです。大好物は甘いもので、大きなシュークリームなども一口で。それにカラオケ。その美声は誰もが認めるところです。音楽や美術からスポーツ観戦に読書と実は多趣味な清水さんの原動力は、旺盛な好奇心でしょうか。そんな人柄がうかがえるのが、理事長を引き継いだ直後の14年7月、『さあ、言おう』7月号に掲載されている堀田さんとの対談です。清水さんの弁から。

「…本来好奇心旺盛な性格ですので苦勞も楽しみなことと言ひ聞かせながらやっていきます。」 「…会社を退職して独立し、そして任意団体としての『さわやか』に参加したこと自体、知り合い皆から相当なりスクチャレンジだと驚かれてきましたので、失敗を恐れず変革へ向けて進むというその点だけは大丈夫です。」

いま、「新しいふれあい社会の創造」という創立以来の夢の実現へ向け、新しく「共生社会づくり」という具体的なプランを掲げて動き出したさわやか丸です。目標は全ての人の尊厳の確立です。新しい働き方や、男女共同参画など、日本全体で新たに必要とされている人と社会のあり方を、30年前から当たり前のことと感じ、先取りして実践してきた「さわやか丸」のこれからのかじ取りに、大きな期待が持たれます。

移住

悪くないですよ

第6回



何があっても 生きていける力

阿部 幹司さん・幸子さん（宮城県栗原市）

● 栗原市

都会の生活では、買い物に行けば食料品や日用品が揃い、ネット通販で何でもすぐ届く現代の日本。しかし、ひとたび大災害に見舞われ、当たり前前（まえ）の便利さを奪（さら）われる事態となるとき、果たして私たちは自分や大切な人を守る「地力」^{じりき}を持（も）っているでしょうか。宮城県栗原市の集落で、中学2年生から2歳まで4人の子どもたちと暮らす阿部幹司さん^{みきうち}（49歳）と幸子さん^{さちこ}（43歳）に、なぜ田舎での子育てを選んだのか聞きました。（取材・文／塩瀬 潔泉）

安心できる場所へ

阿部幹司さんは、もともと宮城県仙台市の出身。

高校卒業後は東京の短大で学んだが、自分が本当にやりたいことがわからずにいた。しかし、特技の水泳を生かしてスイミングスクールで子どもた

ちを教えるようになると、素直で気持ちに通じ合い、懐いてくれる子どもたちと接することをとっても楽しく感じるようになった。その様子を見ていた職場の先輩から「子どもが好きだね」と言われ、初めて自分の特性に気づいたという。幹司さんは保育士になろうと28歳で専門学校に入学。31歳で都内の保育園で働き始め、数年後にヨガインストラクターの幸子さんと知り合い結婚。第1子の妊娠がわかると、2人は仙台市に引っ越した。

「私も青森県出身で、あぜ道を走り回り、木登りをするような子ども時代を送りました。でも東京に出て美容師として仕事をする中で、人の多さ、部屋の狭さ、何かいつも競争している感じにストレスが募り、体調も良くありませんでした。ヨガを始めたのもそのためです。だから夫とも、子どもを育てるのは田舎にしよう」と最初から話していたんです」と幸子さん。

「都会でも地方でも、子どもたちがかわいいのは同じですが、都内の保育園では最初、園庭が狭い



(右写真) 阿部幹司さん
(下写真) 幸子さん(中央)と
4人の娘さんたち



のに驚きました。待機児童も多くて、子どもファーストの環境じゃない感じはありました」(幹司さん)

2人とも子どもはたくさん欲しいと思っていたので、東京では自分たちが思い描く家庭を築くのが難しかった。

仙台市内に引っ越した後、幹司さんは自ら保育



園を開設。長女と次女が生まれたが、やはり仙台も都会で、東京とさほど変わらない生活だった。里山があるような場所で子育てがしたいと移住先を探していた2011年、東日本大震災が起きた。インフラが麻痺し、店舗もガソリンスタンドも長蛇の列。乳幼児2人を抱えて食料が手に入らないことにこの上ない不安を感じ、特に幸子さんは「とにかく子どもを守る、安心できるところに行きたい」と切実に思った。

〇 何があっても生きていける強さ

阿部さん一家は、幸子さんの妹が暮らす山形県最上町に避難。幸子さんが最上町で初めてスーパーに行ったときのこと、全く知らない人が仙台ナンバーの車を見て「大変だったね」と品物を分けってくれた。

「それが普通なんですね。震災でそういうことも経験し、人のつながりは大切だと思うようになり

ました」

その後の見通しが立っていなかった同年6月、幹司さんは最上町から県境を越えてすぐの栗原市の地域^{*}おこし協力隊に応募した。採用されて赴任した花山地区は避難先とも近く、中山間地にあり、子ども時代に訪れたことがあって親しみも感じていた。幹司さんたちが暮らしたいと思う環境だったのはもちろん、何より幹司さんの心を動かしたのは、地元の人々の姿だったという。

「まだ大きな余震も続いていたし、私は単身赴任でとても心細かったのですが、花山の方々はよそから来た私をごく自然に受け入れてくださり、不安定な状況の中でも泰然自若としていました。聞けば、農作物は自分たちで作れるし、湧き水もある。木を切って薪にすれば暖も取れる、と。かっこいいと思いましたね」

また、幹司さんが初めて花山小学校を訪れたときには、子どもたちが駆け寄ってきてあいさつしてくれました。

「感激しました。大人も子どもも、一人ひとりが地域住民としてしっかりしているんですね。うちの子たちもこんな学校に入りたいなあ、と思いました」

移住については、夫婦で話し合いを重ね、幸子さんと子どもたちも何度も花山を訪れ、1年後、家族全員で花山へ移住することにした。

＊地域おこし協力隊

1～3年程度の任期で都市から過疎地に移住し、農林水産業への従事、地場産品の開発等に関わりながらその地域への定住・定着を図る総務省管轄の取り組み。

○ 地域のための事業と、温泉旅館の復活

1年8か月の地域おこし協力隊の任期後、幹司さんに「国立花山青少年自然の家」の臨時職員として働かないかと声がかかり、阿部さん一家の生活基盤が整い始めた。そして15年3月、幹司さんは「株式会社花山サンゼット」を設立。仙台で会

社を経営し、原発など震災での惨状に心を痛めていた父・文雄^{あやお}さんの助言で太陽光発電の保守・管理から始めた会社は、その後も地場産品の6次化や幸子さんがインストラクターのヨガ事業等々、多彩なアイデアで事業をつくり出している。どれも学生インターンや社団法人、地域の人たちとの協働で、幹司さんの人を巻き込んで実現する力によるところが大きい。成功の一番の理由は、「地域のために何ができるか、どうすれば恩返しができるか」という視点だろう。

幹司さんの地域を思う熱意が昨年、地元



復活した佐藤旅館



「温湯温泉 佐藤旅館」を復活させた。佐藤旅館

は、江戸時代には旅人の疲れを癒したという花山の秘湯。08年の岩手・宮城内陸地震で源泉が止まり、当時のオーナーと市が協力して再開にこぎつけようとした矢先、東日本大震災が追い打ちをかけた。気落ちしたオーナーは再開を断念したが、この復活に手を挙げたのが幹司さんだ。栗駒山麓で地熱発電の調査団が駐留するため、佐藤旅館を使いたいという話が出たのを機に、地元の高校に館内清掃ボランティアを呼びかけたところ、20数名が集まってくれた。「みんな本当に一生懸命やってくれて」と幹司さんは感慨深げ。修繕工事代は調査団の利用料を充てるという工夫で乗り切った。その後も佐藤旅館は日帰り温泉として、復活を喜ぶ客が訪れている。

そんな幹司さんがこの先手掛けたいののは、シングルマザー専用アパートをつくることだ。

「保育士時代から、仕事に子育てに一生懸命なお母さんたちの力になれないかと思い続けてきまし

た。今は必ずしも都会でなければ仕事ができない時代ではないし、助け合いがある花山で安心して子どもを育ててほしい。アパートなら、子どもが成長して都市部に出ていくとき、お母さんが一緒に行くこともできます。そして、そこにまた小さな子どもとお母さんが来てくれれば、地域の方々にも喜んでもらえると思うんです」

自然の中で子どもが育つ価値

今では4人の女の子との6人家族になった阿部さん一家。子どもたちの教育についても聞いてみた。

「確かに、中学生ともなれば偏差値での評価等もあります。でも今は、オンラインでもかなり質の高い熱心な塾があるおかげで、うちの子も勉強の仕方が身に付いてきました。昔ほど地方のハンデはないように思います」

そして、母親の幸子さんから見た娘たちの普段

の様子。

「もちろん、上の子たちはスマホで動画を見ていたりして、都会の子と同じ面もあります。でも、ここで生活しながらいろいろなことをやってきたので、今は生活に必要なことは一通り何でもできます」

子育ては田舎で、と移住した阿部さん一家。自然に囲まれた場所でも子どもが成長していくことの、真の価値とは



阿部さん一家が暮らす花山地区の雪景色

何なのだろうか。

「里山での暮らしは一見、美しい自然の中ではないね、ということになるかもしれませんが、実は油断すれば野生動物に襲われるかもしれないし、川で流される危険だってあるわけです。そういう中で生き抜いていくすべは、教科書に書いていないことを、頭でなく五感を働かせて自ら学ぶしかないですね。地域の方々の『何が起きようと、自分たちの生活は自分たちで守る』という強さも、あくまで一人ひとりの経験の蓄積からなっています。だから、震災のような事態に遭遇しても動じることがない。うちの子たちにも、幼少期のうちにそういう経験をして成長していつてほしいのです」

学校での勉強も、1丁の知識も将来役に立つことは間違いない。しかし、どんな状況になっても困難を乗り越えて生きていけるか考えたとき、一番に必要なのは「何があっても動じない、たくましい地力」なのかもしれない。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」 助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。「食」は、人と人とのつながりに大変良い効果をもたらしてくれます。今月号では、そんなあたたかいふれあいを感じられる助成先3団体を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていきますので、ぜひご覧ください。

京都府久御山町

コロナ禍でも就労支援継続 医療関係者らに無償でコーヒーを

NPO法人京都フォーライフ

助成金額 20万円

京都フォーライフは、県からの認可を受けて、企業で働くことが困難な重い障がいがある方々に働く場を提供。

「『自信』と『誇り』を持って働くことを支える」を基本理念として、自立支援に努めてきました。

コロナの影響で、「コーヒー焙煎加工事業」の販売の機会が皆無となり、企業との取引が縮小しました。就労支援の性質上、従業員（障がいのある方たち）の仕事を止めるわけにはいかず、代替えの作業にすぐに対応することが困難な方も多く、また習得した技能を維持していくためにもやむを得ず事業を継続しました。そこで、在庫として抱えてしまうことになるコーヒーを無駄にすることがないように、コロナ感染対策に尽力いただいている方々に無償で提供することになりました。本基金の助成金は、コーヒー豆と資材の購入費用に充てていただきました。

その結果、昨年4月から約半年間にわたり、コロナ感染

対策にあたっては医療機関、保健所、介護事業所等々に
コーヒーを届けることができ、たくさんのお礼の手紙や感
謝状、電話、メールが届いたそうです。

「こうした新しい目標に向けて生産活動を継続できたこと
は大きな励みになりました」「多くの皆様に感謝いただけ
たことは、生産活動に従事している障がいがある従業員だ
けでなく我々支援員にとっても一層励みとなり自信につな
がりました」との報告をいただきました。

神奈川県茅ヶ崎市

居場所のカレーを持ち帰り弁当に 参加者も協力業者も広がる

鶴が台名店街に地域の居場所をつくる会

助成金額 7万5000円

鶴が台名店街に地域の居場所をつくる会は2017年1
月の設立以来、「みんなの居場所」を毎月第3金曜日に、
鶴が台団地の名店街店舗と集会所において、カレーの提供
交流の場（ゲームやお茶会）、「たのしい勉強部屋」の3
つの事業を開催し、乳幼児から中高生、高齢者、障がい者
など110〜130人が来所しています。カレーは、障が

い者就労施設で作った
物を買って提供して
おり、地域包括支援
センターや自治体職員
も来所者に交じって交
流する中で相談につな
がることも多く、多世
代の交流とともに地域
福祉の支援の場にもな
ってきました。

昨年4月以降、コロ
ナの影響で居場所での
カレー提供ができなく
なったことから、持ち

帰り弁当の販売を6〜8月に計6回実施。お弁当は、障
がい者就労施設、名店街の事業者、キッチンカーの3か所
から1回50〜60食を調達し、同時に包括や市のコロナ対策
情報資料を提供。ボランティアのママさんたちが、出産間
もない家庭にお弁当を届ける動きもあったそうです。

本基金の助成金は、お弁当を廉価で提供するために活用
されました。また、第2層生活支援コーディネーターは実
施方法打ち合わせに参加したほか、実施日のうち当初の3



キッチンカーによるお弁当提供の様子

回は活動内容把握のために来訪したとのことです。

「助成金の活用で、カレー弁当だけでなく新たな事業者から仕入れ可能になり、これまで来場していなかった参加者層を広げることができた。特に高齢化が進む団地においてい弁当を廉価で購入できるということが喜ばれた」とのことです。

岐阜県各務原市

畑での交流で コロナ禍の不安を取り除く一助に

つくろ！の会

助成金額 10万円

畑サロンの運営と、ウェブ上での健康な身体づくりに関する情報発信、ここからだを健やかに育むための勉強会、講演会、料理教室等を主催している、つくろ！の会。農家の野菜が規格外になったり、売れ残って廃棄されていることから、2週間に一度「行き当たりばったり食堂」という料理教室も行っています。

「コロナで漠然として不安に駆られる人に対し、今こそ交

流や情報交換の場が求められているが、従来のように集う活動ができないため孤立しがちな状況」として、密を避けながら屋外である畑に集うことで交流し、不安を取り除く一助にしたい、として本基金に応募いただきました。

助成金は、草刈り機の購入、プログラムとチラシのコピー代、落ち葉コンポスト、畑で取れた野菜を使って漬け物を作るための材料費等に充てていただきました。

今後については、「子どもたちがご飯に困ったという話も多く聞かれましたので、子どもが台所に立てるように子どもたちの料理教室もしていきたい」「生ごみや、河川敷の草などを使って虫の来ない野菜を作る有機農業を伝えていきたい」「ただただ、おしゃべりをして心のうちを受容してもらいたい場所を設けたい」ということです。



つくろ！の会作成の「旬カレンダー」

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。4月15日までの状況をご報告いたします。

◎寄付受付額

190件 1030万6700円

このほかに当財団より6千万円を供出

◎助成実行額

441件 5881万5350円

(4月15日 当財団ホームページ開示時点)

長引くコロナ禍は、まだ出口が見えませんが、しかし、人と人が互いを思いやり行動を起こすことで、困りごとを抱える人の生活に希望が見えてくることもあります。本基金は、そのような地域での大切な活動を資金面で支援させていただいています。

「貴財団の日頃のご活動に心から感謝申し上げます。コロナ禍で困っている方々に何か出来ないかと思っていました折、テレビで貴財団のことを知りました。些少ではありますが、少しでもお力になれば幸いです。」
(←寄付者メッセージより)引き続き、誰もが誇りを持って暮らすことができる地域共生社会の実現を目指してまいります。ぜひ、本基金を通してこうした活動にご参加いただけますようよろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

早めの引越

①

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

2007年のクリスマス。私たち仲

間7人は安堵感に包まれ、晴れやかな
気持ちで乾杯をしました。数年温めてきた
「ともだち近居」と名付けた暮らしが、いよ
いよ実現することになったのです。

現役時代、私は少しの時間を見いだしては
仲間と旅行するのが楽しみでした。そんな
時いつも出る言葉が「将来こんな風に気の合
う仲間同士、一緒に暮らせたらいいわねえ」
ということでした。この、単なる夢物語が具
体的に動き出したのは、2002年の遠野旅
行。「私には子どもがいるけど一緒に住もう
とは思わないわ。皆で暮らしましょうよ」と
いう力強い申し出が仲間の一人からあり、事

は一挙に前に進み始めたのです。

私たちが描いた暮らしの青写真は、お一人
様同士、程よい距離をおきながら共に暮らす、
同時にこれまで仕事ばかりで地域社会に何の
貢献もしてこなかったもので、皆の経験を活か
して何か役にたつことをしようというもので
した。早速友人・知人に声をかけ、勉強会を
開始。「新しい可能性を拓く住まいづくりの
会」と名付けました。14、15人も集まったで
しょうか。どんな住まい方がいいか、地域貢
献として何が出来るか等々、議論したりアン
ケートをとったりと、実現への可能性を探り
始めました。しかし次第に参加している人の
間に温度差があることが分かり、改めて、本





気で参加したいという人だけに絞り、計画を練り直しました。

無謀にも当初私たちは、土地を買って家を建てようと考えていたのです。土地の情報が入るとすぐ見に行き、ああでもない、こうでもない。Aさんが気に入ってもBさんはダメ。何十カ所、土地を見たことでしょうか。帯に短し襷に長しの状況が続く中、私たちはやっと現実の厳しさに目覚めました。夢に浮かされたように前のめりになって土地、土地と、土地探しに奔走したものの、私たちの経済力では土地を買って家を建てるなんて到底できないと悟ったのです。この間4年。次第に重苦しい気分が漂い始めました。このまま続けていいのだろうか。私は思い切って言いました。「残念だけど、この会は解散しましょう」。2007年10月のことです。

思い切れない気持ち半分、でも仕方がないなという気持ち半分。私の提案には誰からも

積極的な賛意は示されませんでした。結局ここまで努力してきたのだから、今年一杯土地探しをして、クリスマスに解散会をして終わりにしようということで落ち着きました。そうと決めても「私はやっぱりみんなと一緒に住みたい。寂死するのはイヤ!」というメールを送ってくる人がいるなど、皆の離れたい思いは尾を引いていました。

重い気持ちを抱え、マンションという選択も視野に入れて探している時、駅前でもらったティッシュに、ふと目が。来年竣工予定のマンションの宣伝でした。友人が即座に「私、みてくる」と出かけました。そしてその夜、全員にメールが。「あそこ、いいわよ」。順次、全員が見に行き、全員一致。「ここがいい!」。

キャリア姉さんズの決断は、あつと言う間でした。かくしてクリスマスは、お別れ会どころか、祝賀会となった次第です。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。



父と娘の認知症日記

長谷川式認知症スケールは、認知症診断の物差しとして多くの医療・介護の現場で用いられているが、その開発者である長谷川和夫氏が自ら認知症を公表したのは2017年、88歳の時である。自身の認知症を公表された後も認知症に関する本を世に送り出してきた同氏であるが、本書は、副題に「認知症専門医の父・長谷川和夫が教えてくれたこと」とあるように、長女である南高まり氏の視点から、医師としての和夫氏、認知症者としての和夫氏、大切な家族としての和夫氏の姿が、これまでの折々の和夫氏の日記や写真を織り交ぜ、まり氏のエッセイやインタビュー記事で描き出されている。

「認知症」の人という捉え方ではなく、認知症の「人」と捉え、「その人らしさ」を中心に置くケア＝「パーソンセンタードケア」こそが、人の尊厳を支えるケアであると提唱してきた和夫氏。「超高齢化時代」になり認知症は誰にでも起こりえるものとなったが、地域で暮らし続けられるように支え合いの努力をしていきたいと語った和夫氏。認知症発症後もまり氏と絵画鑑賞や映画、演奏会に出かけ、大好きな読書を楽しみ、地元の行きつけの喫茶店や床屋に通い、地域で見守られながら尊厳を保持して暮らしている様子が紙面からさまざまに映し出される。

認知症を公表したことにより講演や取材の依頼が増え、それにまり氏が付き添

い見守ってきたが、年を重ねるにつれ話が脱線したり、同じことを繰り返したりということが増え、周囲から「引退した方が良いのでは」という趣旨の声が届くこともあったという。しかし、まり氏は「父にしか言えないようなキラッと光る言葉」に気づき、温かくサポートしている。実際、本書の中にもキラリとした言葉がたくさんちりばめられている。

「一人ひとり違う人生の流れがあって、その流れを大切にしないといけない。生きているうちが一番華だ。明日に比べれば、今が一番若い。だから今を生きたということが華だ。誰かのために尽くしたい。」

クラシック音楽が好きな和夫氏、そして音大卒のまり氏、その会話を通じて優しい音楽が奏でられているような読後感を味わうことができる。



長谷川和夫・
南高まり 著
中央法規出版
1,430円（税込）

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

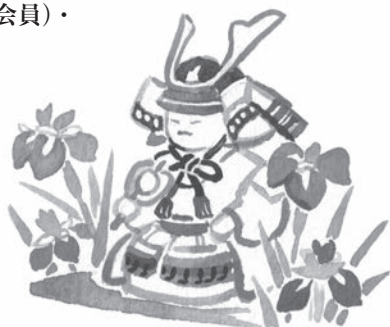
● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





新地域支援事業・ 各地の動き

(2021年3月1日～31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

住民に参加を呼びかける (住民対象のフォーラム、勉強会等)

美浜町 (福井県)

25日／美浜町で、助け合える地域を目指す住民フォーラムとして「みんなを支える美浜のまちづくり」が開催され、当財団も協力。十分に間隔を空けてコロナ対策をした会場には約100名の住民が集まった。町からは地域参加へ

のきっかけづくりの一つとして4月からスタートする「地域あいあいポイント事業」についても説明。財団からは「地域活動参加の効果」について説明。コロナ禍の中でつながる大切さ、自分のための活動から助け合いへ発展させ日常生活をみんなで支え合っていくことを中心に事例等を紹介し、積極的な地域参加を呼びかけた。

(高橋)

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

滝沢市 (岩手県)

26日／第2回滝沢市地域支え合い連絡会に、県のアドバイザーとして当財団がオンラインで参加。新年度に2層づくりを進めたいとの意向もあり、新地域支援事業の意義と生活支援コーディネーター・協議体の役割、2層の体制づくりに向けての住民主体による方法を事例を通じて当財団から情報提供した。次に、参加者からは感想やサロンの取り組み紹介などが行われた。そこ

で、それぞれ活動の素晴らしさとともに、5年後10年後、さらに少子高齢化が進み人口が減少する中での住民の暮らしの課題や現状を伝え、これから2層づくりに向けて、地域みんなで目指す姿を話し合い、住民主体の助け合い地域づくりを推進していくことの重要性を再度共有した。これまでの取り組みを生かしながら、住民主体を意識した動きが始まる。

(鶴山)

軽米町 (岩手県)

8日／軽米町の第1層協議体勉強会がオンラインで開催され、県のアドバイザーとして当財団が協力。1月に開催したオンライン勉強会1回目を受けて、同町協議体「結つこの会」は2月に集まり「やってみよう」と居場所チームと有償ボランティアチームに分かれ協議しての企画。この日は居場所(いつでも誰でも型)と有償ボランティア(移動支援中心)についての具体的な勉強会となった。

居場所については、空き家を活用し

た場合と公民館等を活用した場合のメリット・デメリットなどの質問に回答しながら進めた。有償ボランティアについては移動支援のニーズが高いという意向を受け、財団作成の「助け合い活動創出ブック」を活用し、基本を押さえながら、多様な生活支援（地域通貨、有償ボランティア等）の事例を紹介した。同町は助け合いづくりに向けて少しずつ動き出している。県内で地域に仕掛け、広げる動きが始まっていくモデルになつてほしい。（鶴山）

洋野町（岩手県）

3日／岩手県のアドバイザー派遣事業による当財団の洋野町支援3回目。これまで生活支援コーディネーターらがモデルとして関わってきた大谷地区（第3層）での座談会を住民主体にしていく方法と、その後の生活支援コーディネーターの関わりについて、生活支援コーディネーターの高屋敷恵氏から相談があったもの。

大谷地区では何を目的に住民が座談

会をしたのか、その目的を達成するために生活支援コーディネーターは必要な情報提供や相談で関わること、また、モデルとしての発信も必要となるため、その情報収集として関わっては、と伝えた。さらに、助け合いを広げる観点から、やってみたいことについての情報提供し、住民の熱が冷めないような働きかけをしていくことが、気持ちで取り組む助け合い活動の推進として大切であることなどを事例を交えて共有した。

新年度、洋野町はこれまでの気づきから、市民フォーラムで地域の理解者を広げながら、助け合いを広げる体制を進めていきたい意向があり、財団も支援していきたい。（鶴山）

志木市（埼玉県）

16日／志木市第1層協議体がオンラインで開催され、当財団もオブザーバー参加。参加者は約20名で、現役世代と見られる人もいて、多様な参加者が活発に議論していた。コロナ禍で協議体

の開催が難しいことから、居場所コア会、情報発信コア会、啓発品コア会に分かれてこれまで議論、活動を進めてきている。この日はオンラインで協議体を開催した。コア会ごとの活動を第1層生活支援コーディネーターが説明して情報共有し、各委員の活動における感想と、各コア会の今後の活動予定が発表された。

オンライン開催にあたっては、協議体委員も協力。オンラインが苦手な委員に対し、パソコンやWi-Fiが使える公共施設（図書館、総合福祉センター、市民活動センター）に、協議体委員の協力を得てオンライン参加の環境を整えた。財団からは、男性の居場所づくり等をアドバイスした。（岡野）

嵐山町（埼玉県）

22日／嵐山町第1層協議体会議が開催され、当財団も参加。コロナ禍での事例を紹介し、工夫次第で活動できることを伝えた。その後、移動支援分科会の報告、住民活動拠点立ち上げについ

て議論が交わされた。また、第1層協議体をよりわかりやすく伝えるために愛称を付けることを検討しており、財団から他市町村の協議体愛称を紹介したい。今後も情報提供等で協力していきたい。

渋谷区（東京都）

15日／渋谷区では2月に地域包括支援センター関係者向け勉強会を実施しており、当財団も協力している。今回は、その後千駄ヶ谷地区の包括センター長から出された要望を受け、センターの職員とともに体制整備事業に係る意見交換を実施した。渋谷区では住民主体の取り組みの実践を目指し、包括11圏域の構想で協議体の再編成を予定している。

（長瀬）

上野原市（山梨県）

4日／上野原市は、数年前に当財団の支援もあり2層9地区中5地区まで体制ができていたが、コロナ禍等もあって協議体が開催されていなかった。この日、行政・社会福祉協議会が共通理

解をもって2層を充実し、地域に働きかけていこうと勉強会が開催され、当財団も県のアドバイザーとしてオンラインで協力した。

市からの目的説明とあいさつ、参加者の自己紹介に続き、財団より「このまちに住んでいてよかったと実感できる地域づくりの推進」として講演、その後、質疑応答を行った。講演では、新地域支援事業の意義と生活支援コーディネーター・協議体の役割を伝え、「お願いする」から「気づいて主体的な参加」へとボトムアップの体制をつくること、ニーズの掘り起しと助け合い創出について伝えた。また、2層づくりと柔軟な協議体のあり方として、他県の市町の事例を紹介し、行政と生活支援コーディネーターの関係（丸投げでなく一緒に考えながら行政がバックアップ）を伝え、「生活支援コーディネーターが孤立しないように」と伝えた。どれだけ地域住民を巻き込んでいくかについても共有。今後、2層づ

くりを再構築しながら、住民同士の地域助け合いづくりを進めていく予定。

（鶴山）

韮崎市（山梨県）

4日／韮崎市は、第1層の体制はできているが、どのように地域に働きかければよいか具体的な仕掛け方を課題としており、県のアドバイザー派遣事業に手を挙げ、当財団が支援。この日は、介護連携・生活支援体制整備合同会議の「生活支援体制整備部門」の会合に財団が講師としてオンラインで参加した。

財団からは、生活支援体制整備事業の意義と生活支援コーディネーター・協議体の役割の基本を伝え、モデルとしている富士見ヶ丘団地で行った住民アンケートの内容から、地域での助け合い創出や助け合い活動、体制づくりにヒントになればと事例を紹介して考えてもらうことにした。例えば、地域で孤独死が発生したことから住民が危機感を持ち、生活支援コーディネータ

ーらが協力して調査したニーズから、生活支援コーディネーターらが情報提供などバックアップをして有償ボランティアを町内会で立ち上げた鹿児島県鹿屋市を紹介。また、静岡県袋井市でいつでも誰でも型の居場所を展開していた「たすけあい遠州」がコロナ禍で柔軟に活動を進化させ、これまでの絆や助け合う関係を強くした事例などを紹介し、考えてもらおう機会となった。今後の展開に期待したい。

(鶴山)

北杜市(山梨県)

8日/県のアドバイザー派遣事業として、当財団が北杜市に協力。この日は、新年度に住民フォーラムを開催したいがどのように進めればよいのかという相談があり、そこに向けた共通理解のための研修会にオンラインで参加した。同市のこれまでの取り組みを共有するとともに、事前に届いていた質問事項に対して回答しながら、事業の基本と市民フォーラムからの住民主体による体制づくりや助け合いづくりの話

事例を交えて紹介した。今後の展開にもバックアップしていきたい。(鶴山)

忍野村(山梨県)

1日/忍野村で事業推進の中核となる行政と社協の共通理解を目的とする勉強会が開催され、当財団が県のアドバイザーとして協力。同村では、協議体設置がこれからという状況。今後、住民主体の体制づくりを目指すために、大づかみ勉強会の1回目を体験してもらうことで、基本を押さえ住民主体による助け合いの地域づくりを推進していくための理解とイメージを持つってもらうこととした。

講義では、事業の意義、生活支援コーディネーターと協議体の役割、住民主体による効果、多様な助け合いの事例、目指す地域像を考えること等について伝えた。その後、目指す地域像についてのグループワークを住民の立場で体験してもらい、気づきを出し合った。生活支援コーディネーターが地域に入って住民の声を聞いていくこと

の大切さも伝えたところ、「グループワークはどうやって住民に呼びかけていけばよいのか」という質問や、「住民に働きかけることが必要」などの意見が出された。今後も県と共にバックアップしていきたい。(鶴山)

犬山市(愛知県)

29日/犬山市の第2層生活支援コーディネーターを含む関係者勉強会を県の助言者派遣事業で協力した。協議体の取り組みから助け合いの実践につなげるために、制度の振り返りとともに、生活支援コーディネーターや関係者の役割についてグループワークを実施。他制度との関わりなど広い視野で意見を交わすことができた。(長瀬)

幸田町(愛知県)

4日/幸田町の関係者と当財団で、生活支援体制整備事業に関する意見交換をオンラインで実施した。この個別支援は、昨年12月にオンラインで開催された同県の研修から、事業推進の必要性を感じ県の助言者派遣事業で実施に

つながったもの。県レベルのバックアップが機能している。今回の協議では、現状の課題などを確認し、対策へのきっかけにつなげることができた。

(長瀬)

新潟市（新潟県）

30日／新潟市で戦略会議が開催され、当財団もメンバーとして参加。①支え合いのしくみづくり 今後の体制について、②地域包括ケア推進モデルハウスについて、③「お互いさま・新潟」（有償助け合い）について、④その他の議題について話し合われた。

①では、生活支援コーディネーターの異動に伴う推進について協議した。②では、モデルハウスの「役割」「基本的な要件」「機能・活動」「目指す機能・役割」としてポイントを書き出し、それが「介護予防」「生活支援」「地域共生社会」としての取り組みになっているか確認するリストを協議し、各1層が課題も含めて評価し、第1層連絡会で話し合うことになった。③で

は、コロナ禍で停滞した有償の助け合いを再開していこうと議論した。

(鶴山)

村上市（新潟県）

16日／5年前の村上市の体制づくりとフォーラムに当財団が協力して以降、毎年合同勉強会に助言者として依頼を受け参加している。合同勉強会は、生活支援コーディネーター・協議体、行政等が参加して、1・2層の1年間の取り組みと課題を紹介し合い、質疑応答する情報交換方式。今回も、2層5地区と第1層が活動を報告し、全体で質疑応答しながら情報交換した。その後、第1層生活支援コーディネーターから21年度の取り組みに向けて方針提案が行われ、まとめと講評を財団と新潟県から行った。

コロナ禍で活動を一度は中断したものの、感染防止をしながら集落単位で話し合うなど、「とにかくやってみる」と住民の声を聞く動きが見られた。やはり集まって話し合いをすることが住

民の主体的な動きにつながることが見えた。また、「生活支援としての移動支援を検討しては」との声が上がり、気兼ねなく頼みやすい方法としての有償ボランティアといつでも誰でも型の居場所の意義を伝え、創出を始めていこうと提案した。

(鶴山)

珠洲市（石川県）

11日／珠洲市・市社協の主催で「令和2年度地域の助け合いづくり研修会」が開催された。珠洲市では地区社協が第2層協議体と位置付けており、今回は第2層協議体の活動を活性化するための支援の場として正院地区、蛸島地区を対象に実施し、2地区からの活動報告も行われた。当財団はリモート参加で協力し、協議体の役割、地区社協との違い、活動方法について説明した。その後、第1層生活支援コーディネーターの進捗で具体的活動について協議、共有した。

市では今後、他地区での研修も実施していくとともに、市社協と連携しな

がら活動創出への丁寧なフォローアップを行っていく予定。
(高橋)

美浜町（福井県）

25日／美浜町では住民の助け合い活動参加へのきっかけづくりとして4月1日から「地域あいあいポイント事業」を始める。本事業は協議体が話し合いを重ねてきたもので、今回は地域が助け合いの意義を理解し協力していくようボランティア受け入れ施設等を対象に関係団体研修会が開催されたもの。行政からのポイント事業の説明に続き、当財団からは活動参加による介護予防の効果だけでなく、生活のいきがい・やりがいの創出について動画も交えて紹介した。

今後は市民にも広く周知を行い、助け合いを広げていく予定。
(高橋)

協議体編成のための 研修会・勉強会等に協力

美里町（埼玉県）

11日／美里町大沢地区で、第2層協議

体設置のための大づかみ勉強会の3回目が実施され、当財団も協力。コロナが収束せず、今後、住民活動が再開できるのかという不安もあることから、財団から他市町村におけるコロナ禍の活動事例を紹介してから勉強会に入った。

今回は、これまでの勉強会の振り返りと、地域に必要な活動を1つに絞る具体的な内容を3グループに分かれて話し合った。活動として挙げたのは、買い物代行（有償ボランティア）、地域のつながりの活性化（百歳体操、多世代型サロン）。感染対策で短時間の実施となる中でも活発な議論が交わされた。勉強会終了後、アンケートで協議体に参加したい方を募り充足する。4月に1回目の話し合いをする予定。財団も引き続き支援していく。（岡野）

羽咋市（石川県）

15日／羽咋市では、公民館単位で第2層協議体を編成中。今回はその中の一つである粟ノ保地区での第1回目の

「地域で支え合うまちづくりを考える会」（協議体準備会）で、当財団はリモートで協力した。市からは市内状況と取り組み方針の説明、続いて生活支援コーディネーターから地区の状況報告が行われた。財団からは助け合いの意義と協議体の役割について説明。準備会は今後、あまり間を空けずに開催する予定。
(高橋)

生活支援コーディネーター 養成研修等に協力

群馬県

5日／群馬県西部ブロックの生活支援コーディネーター連絡会が開催され、当財団も県の推進協議会担当としてオンラインで参加した。今回は、「企業との協働に関する勉強会」として県内企業から社会貢献活動についてプレゼンテーションの機会を得た。企業側の実践に向けた課題や条件など具体的な説明があり、貴重な情報に、参加した生活支援コーディネーターから積極的

に質問や意見が出された。大変有意義な時間となった。

(長瀬)

新潟県

25日／新潟県で「令和2年度生活支援体制整備事業情報交換会」がオンラインで開催され、当財団が助言者として参加した。県のあいさつに続き、同県柏崎市、村上市、弥彦村の事例紹介が行われ、発表に対して、県の進行により助言者や参加市町村全体で情報交換し、共有した。3市村の事例は住民主体の基本を押さえながら、それぞれ特徴を持ち、楽しんで進めている様子が伝わった。

「コロナ禍だからこそ、生活支援コーデイネーターの動き」「コロナ禍での協議体の開催方法や助け合い活動の工夫」について、財団から他県の取り組み事例を挙げ「どうやったらできるか」と工夫していることを紹介した。ほかにも、「助け合い活動への参加者の増やし方」「引きこもりがちな市民を居場所に來てもらう工夫」「補助金

を使わない移動支援」等の質問があり、助言者として参加された支え合いのしくみづくりアドバイザー河田圭子氏や全国移動ネットの河崎民子氏が参加市町村と情報交換した。オンラインでグループワークはできなかったが、県の工夫もあり、住民主体の助け合いの地域づくりに沿った情報交換会になったと思う。

(鶴山)

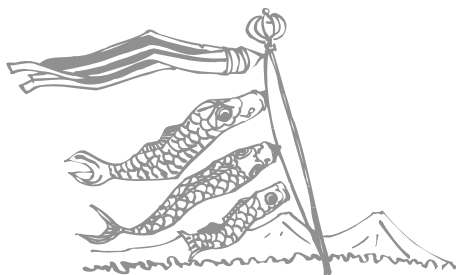
福井県

1・2日／「令和2年度 生活支援コーデイネーター全体研修会」が福井県内の生活支援コーデイネーター、市町村担当者を対象に県主催で開催された。コロナ対策として、参加者は各市町村庁舎に集まりリモート接続する形式とした。グループワークも開催するため、同じ内容を2日間行い参加者の分散を図った。他自治体の取り組み事例を紹介する岡山県倉敷市第1層生活支援コーデイネーターの松岡武司氏と当財団もリモートで協力した。県で実施した情報交換会でも関心の高かった「有償

ボランティア」「移動支援」の事例と立ち上げ手法も盛り込んで説明。庁舎には集まらず個別のリモート参加した人もグループ化してワークを進行、具体的な実践方法を考え共有した。

県ではさらに、市町村が開催する住民向け勉強会等の開催についても講師派遣等を行い、支援していく。(高橋)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、
鶴山芳子、長瀬純治)



『さあ、言おう』 バックナンバーのご紹介

◎ お問い合わせは広報まで ◎

電話：(03) 5470-7751

メール：pr@sawayakazaidan.or.jp



2021年
4月号

- 巻頭言「新年度に寄せて」
清水 肇子
- さわやか福祉財団の軌跡
「真っ直ぐに、30年」堀田 力
＜寄稿＞堀田さんのこと
弁護士 清水 勇男
- 今風女子
「どんな役割も受け止め、応えてきたから “今” がある」大川 繁子さん
- 移住 悪くないですよ 岡山県新見市
- 連載3 老いの暮らしを創る
「老後、誰とどこで過ごしますか」
村田 幸子 ほか



2021年
3月号

- 巻頭言「地域づくりは自分づくり」
清水 肇子
- 厨房男子
「妻と一緒にやるのが当たり前」
中根 敏雄さん
- 活動の現場から
おたがいさまネットみなみ
(神奈川県南足柄市)
- 移住 悪くないですよ 富山県氷見市
- 連載2 老いの暮らしを創る
「人貧乏」村田 幸子 ほか

一般社団法人家の光協会
NPO 法人 ケア・ハンズ
NPO 法人 芸南たすけあい
一般財団法人国際長寿センター
品川成年後見センター

さわやかパートナー法人(10件)

(50音順)

大蔵 知恵子 長崎県
高知県 瀬口 卓也
西元 和代 大分県
福岡県 高木 佳奈枝
藤原 芳恵 宮崎県
戸袋 勝行 沖縄県
岡上 マチ子

一般ご寄付(8件)

(50音順)

NPO 法人 市民助け合いネット
有限会社 藤樹
豊田通商株式会社
日本地震再保険株式会社
NPO 法人 ひまわり福祉サービス

地域助け合い基金ご寄付(5件)

(ご寄付日付順)

日本ライフライン株式会社 (2千万円)
丸山 式子 (1万円)
匿名希望 (1万8360円)
匿名希望 (40万円)
ヒノクマ アツコ (5千円)
丸一義 (1万円)
永田 美樹 (1万円)
川口 剛 (3万円)
片山 順子 (2万円)

NEWS

& にゅーす



第30回 理事会を開催

3月17日、東京・芝公園のメルパルク東京において、午後1時より3時半まで理事会を開催しました。引き続きコロナ禍の情勢が不透明であり、開催形式は前回同様ウェブ会議システム併用とし、3名の理事がオンラインにて参加しました。

冒頭、堀田力会長より当財団が設立して30年を迎えるにあたり、心の豊かさやつながりがますます重要になってきているという社会背景の下で、コロナ禍が生じたことでつながりの重要性がより一層自覚されてきていることや、当財団が従来から注力してきた高齢者を中心とした生活支援の助け合いに加えて、すべての人がいきがいを持って暮らせる地域共生社会が今こそ求められている、との説明がありました。こうした中、昨年5月に「地域助け合い基金」を立ち上げ、寄付と財団の資金を原資として全国の約400の団体・個人に対して5千万円を超える助成を行ったこと、さらにこれを発展させる形で地域共生社会づくりの活動に取り組んでおり、今後、全国自治体の首長、企業、地域の人材、学生等に訴えていくとの説明がありました。また、昨年9月に予定していた「いきがい・助け

合いサミット in 愛知」は延期しましたが、本年9月には「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」を開催して地域共生社会へ向けメッセージを発する、との説明がありました。

続いて、清水肇子理事長より2021年度の事業計画と予算の概要について説明がありました。前年に引き続き新地域支援事業を重点的に進めていくとともに、堀田会長より説明のあった地域共生社会の実現に向けて強力に取り組んでいくこと、公益目的事業は3つの事業で14のプロジェクトを推進すること等の説明がありました。

以上の説明の後、理事全員と質疑応答を行い、議案は全会一致で全て原案通り可決承認されました。

(内田 信幸)



地域共生社会に向けて、みんなで推進しよう

ブロック全国協働戦略会議を開催 地域共生社会に向けた議論始まる

3月23・24日、ブロック全国協働戦略

略会議をKFCホール（東京・両国）

で開催しました。全国のさわやかイン

ストラクター75名と助け合い推進パー

トナー（生活支援コーディネーター等

で、共に助け合う地域づくりを推進し

ている方々）84名、厚生労働省からも

5名が参加され、今後の地域共生社会

に向けて、

住民主体に

よる助け合

いをどう推

進していく

のか議論し

ました。コ

ロナ禍のた

め、オンラ

インと会場



参加併用での開催となりました。

冒頭に清水肇子理事長からあいさつ

と会議の趣旨説明があり、その後、堀

田力会長の進行で、テーマごとに議論

を進めていきました。

△23日▽

Ⅰ 地域共生の拠点づくりと

地域助け合い基金

まず堀田会長から、戦後から現在ま

での社会の変化と対応策についての話

があり、財政難と人材難がさらに進む

今後、高齢者中心から、子ども、障が

い者、生活困窮者、外国人等まで視野

を広げた地域共生社会の地域づくりを

誰がどう進めるのか、「結局、住民が

動かなければ地域は動かない」と提言

があり議論が始まりました。次に、住

民主体の取り組みを支援する基金の例

として、石川県能美市と埼玉県草加市

の事例を共有。昨年5月から当財団が

全国レベルで立ち上げた「地域助け合

い基金」の現状も共有し、参加者から

も各地の取り組み紹介があり、市民活

動を推進する既存の基金を活かしなが

ら、さらに充実し発展していくにはど

うしたらよいか議論し、考えました。

続いて、拠点となる地域プラットフォーム

の形成について新制度の動きとそ

の必要性を共有しました。

2 いきがい・助け合いサミット in

神奈川と助け合い創出の主な課題

一昨年の大阪をホップ、今年9月の

神奈川をステップ、そして、ジャンプ

となる来年度の東京開催を視野に、

「いきがい・助け合いサミット in 神

奈川」の新企画分科会や会場の様子な

どを説明しました。その後、住民主体

による助け合い推進に向けて、好事例

や課題のある事例など、各地の多様な

事例を参加者が紹介。続いて、助け合いの核となる居場所と有償ボランティアの事例を共有しました。コロナ禍を乗り越える居場所の取り組みとして、当財団が制作した動画「NEXT」の注目ポイントや、居場所から発展した助け合いや有償ボランティアの事例として新潟市等の事例が紹介されました。

3 助け合い支援のあり方と考え方

制度を生かしながら住民主体による助け合いをどう広げていくのか、ポイント制による有償ボランティアを推進している大阪市や寝屋川市の事例が紹介されました。続いて、補助による助け合い活動の法的位置付けについて、当財団のエグゼクティブアドバイザーで医療経済研究機構主任研究員の服部真治さんと堀田会長のミニ対談があり、各地の多様な補助のあり方の事例紹介を踏まえて、制度を生かしつつ住民の主体性を損なわずに面として助け合い

活動を推進していくことをあらためて確認しました。厚生労働省の平嶋由人係長からは「総合事業は目的でなく手段、地域活動を後押しするもの。B型や一般介護予防など、どちらがいいのか、また、どのくらい柔軟に支援するかは市の方針による」とのコメントがありました。

さらに、当財団が昨年11月に発表した「希望するすべての要介護者に助け合いによる生活支援を」という緊急提言について、その背景を含めて堀田会長が説明しました。そして、介護度にかかわらず、どんな状態でも一人ひとりの尊厳を尊重しながら、その人を生かしながら推進してきた助け合いの実践事例を紹介してもらい、「これから地域共生社会に向かって展開していく基本的テーマについて情報交換しました。思いを実践の中で生かしてほしい」と堀田会長がまとめました。

△24日▽

県単位の各地の推進体制に向けて

さわやかインストラクターを対象に、県単位での推進体制に向けて、清水理事長の進行で議論を行いました。これまでさわやかインストラクターは、13ブロックを単位に当財団と協働して助け合い活動を推進してきましたが、新地域支援事業が始まった6年前からは次第に県単位にブロックを細分化して取り組みを進めてきました。その現状を共有し、これからの重点活動として「これまでの人脈を生かしながら、それぞれの地域で助け合いをリードできる人材を掘り起こしていこう」と清水理事長から提案があり、多様な各地の取り組み状況を出し合い議論しました。最後に「人材発掘のやり方はいろいろある。地域で暮らす一人ひとりの尊厳ある暮らしを目指して、さらに県単位の推進ネットワークを進めていこう」

とまとめました。推進体制に向けて、
県単位の具体的な話し合いが各地で始
まります。
(鶴山 芳子)

住民が動かなければ

地域はよみがえらない

地域助け合い基金首長勉強会で
堀田会長が連携呼びかける

4月14日、NPO法人地域共生政策
自治体連携機構主催の首長勉強会がオ
ンラインで開催され、全国40以上の市

町村の首長や担当者、同機構の企業・
団体会員や名誉会員が参加。当財団の
堀田力会長が「住民が動かなければ地
域はよみがえらない 住民が動くため
の拠点をつくろう」というテーマで講
演しました。

「グローバル化や格差が進んだ社会か
ら、これからは地域共生社会、すべて
の人がその人らしく生きられる “人間
開花社会” に進まなくてはならない。
そのためには住民が動くための支援の
拠点が必要」とした上で、当財団が推

進する地域共生社会のためのプラット
フォームと地域助け合い基金について
プレゼンテーションしました。

講演後には「住民が自発的に社会参
加する環境をつくるには、プラットフォーム
が大変重要」「学生へのアプロ
ーチは大変興味深い」等の感想が聞か
れました。当財団としては、関心を寄
せてくださる自治体に個別に説明させ
ていただくなど、今後も連携して推進
していきたいと考えています。

(編集部)

2021年度 地方自治体からの新研修生ご紹介

支え合うコミュニティの
共創を通じた学びについて

東京都教育委員会

みかみ

三上 宗佑

4月より、東京都教育委員会から、
「令和3年度長期社会体験派遣研修生」
として新地域支援事業を担当させていた
だくことになりました三上宗佑としまし

す。入都してから、12年間を特別支援学
校の教員として勤務してきました。子ど
もたちと共に学びながら教員生活を過
していた中、平成29年告示の特別支援学

校学習指導要領の改訂作業に携わるとい
う縁がありました。その中で「社会に開
かれた教育課程の実現」というキーワー
ドにはたびたび触れることがあり、これ
からの学校づくりについての思案を巡ら
せていました。子どもたちが教育や日常
の生活の中で健やかに成長していくた
めには、近隣地域との密な連携が欠かせ
ないことは明白です。しかし、学校と地
域との連携は昨今のコロナ禍によって大
変難しい状況になってしまったと感じて
おります。

そのような状況においても、学校が地
域との確かな連携を築いていけるよう
に、さわやか福祉財団の業務に打ち込み、
たくさんの方の気づきを得られるよう精進
したいと思います。

新地域支援事業を通して、地域を知り、
またその地域の住民の方々がいきいきと
暮らせるような共生社会のあり方をたく
さんの人との関わりの中で考えていくと
いう経験は、自分自身にとってかけがえ

のない財産になると思います。また、さ
わやか福祉財団で学んだことを都の教育
に還元できるはずであると期待してい
ます。

経験や力が不足していると感じる部分
は多々あるかと思いますが、微力ながら
尽力させていただきますので、どうぞよ
ろしくお願いいたします。

共生社会の実現に向けて

神奈川県

沼崎

未来

4月より研修生として新地域支援事業
を担当させていただくことになりました。
神奈川県沼崎未来と申します。

県に入庁してからは、給与事務、再生
可能エネルギー等を蓄えることができる
電気自動車や水素エネルギーの普及推進
業務を担当してきました。福祉関係の業
務に携わるのは初めてですので、これか
らいろいろなことを学んでいきたいと思

います。

さわやか福祉財団では、住民主体の助
け合い活動を支援しているということで、
この1年間の業務を通して、住民の皆様
が主役として地域を支えていく仕組みづ
くりについて、新たな視点や考え方を得
たいと思っています。これまでは、課題
解決に向けて行政として何ができるか考
えて仕事をしてきましたが、行政の立場
を一時離れ、地域の力で何ができるのか
を考えていく中で、改めて行政の役割を
見つめ直していければと思います。

短い期間ではありますが、精力的に活
動されている全国の皆様と共に、共生社
会の実現に向けて尽力していきたいと考
えています。よろしく願います。



新職員紹介

不安と希望でワクワク

澤 さわ
美杉 みすぎ

4月1日から入団しました澤美杉と申します。私は、生まれも育ちも兵庫県宝塚市で、中学校で訪れた山口県萩市に憧れ、1ターンで萩市役所に就職しました。市役所では、人事部門、高齢者支援部門での勤務が長く、昨年4月から1年間は都市計画課でした。高齢者支援課では第

2層協議体の立ち上げに携わり、萩市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターさんや地域の皆さんの頑張りに感動しきりでした。都市計画課では、福祉とは異なった視点でまちづくりを考え、また、景観指導や都市計画に触れる等、貴重な経験ができました。

さて、多くの方にとって萩市のイメージは、「維新胎動の地」「夏みかんと土塀」でしょうか。実は、萩市には世界遺産「明治日本の産業革命遺産―製鉄・製鋼、造船、石炭産業―」の5つの構成資産があり、ジオパークにも認定され、海の幸、山の幸に恵まれた魅力溢れる自治

体です。江戸時代の古地図を片手にまち歩きもできるんですよ！ 大好きな萩市を飛び出して、今度は財団のお仕事を通じて新たな出会いに今からワクワクしています。少子高齢化というと暗い話題になりがちですが、私は、自分の住んでいる地域を見つめ直す良いチャンスだと思っています。それぞれの地域が持っている素晴らしいものを活かし、「ずっとここに住み続けたい」と思える地域づくりに携われることを大変幸せに思います。まだまだ未熟ですが、どうぞ、よろしくお願いします。

さわやか活動日記 (抄)

〈2021年3月1日～3月31日〉



ふれあい推進事業

生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト

全国フォーラムで事例を紹介



【3月10日】

内閣府主催の「小さ

な拠点づくり」全国フォーラムが東京都新宿

区で開催され、連携先として事例紹介を行いました。全国から500名を超える方々がオンラインで参加した。フォーラムは第1部で「小さな拠点とは何か―原

点を考える―」について明治大学の小田切徳美教授が講義。ほか各地の実践が紹介された。どの事例も「できることから」と前向きな取り組みが紹介され共有した。

その後、連携先として郵便局、JA、福祉地域交通をテーマにした分科会に分かれ、それぞれの取り組みや連携についての提言が行われた。当財団は福祉の分科会を担当。「絆を結ぶ居場所から地域づくりの拠点へ」と題し、居場所の時代による進化と住民主体による取り組み事例を紹介し、小さな拠点や地域運営組織との連携として「地域共生社会に向

けて住民主体の取り組みを共に」「プラットフォームと地域助け合い基金の取り組みを進めよう」と呼びかけた。「誰もが好きなこと、得意なことを活かしてコミュニティの中で活躍できる」地域が広がるように、今後も連携を進めていきたい。

(鶴山)

社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高齢社会NGO連携 携協議会総会開催

【3月30日】

高齢社会NGO連携
協議会2020年度総

会をオンラインにより開催。総会に先立ち、10時半より役員会を開催した。役員会では、共同代表の樋口恵子氏と当財団の堀田力会長出席の下、役員12名中11名参加（1名委任状提出）。議題は、2021年度事業計画と総会の進め方。

総会は、全24会員団体中13団体参加、11団体の委任状提出を受けて成立。大上真一氏（一般財団法人長寿社会開発センター国際長寿センター参与）を議長として、第1号議案：21年度事業計画、第2号議案：21年度予算、第3号議案：役員選任の件、の3議案が全員一致で承認された。第

1号議案については、1・政策提言及びそのための調査事業としては①「高齢女性の雇用を含めた社会参加」についての研究提言、②「助け合いによる社会参加」についての研究提言、③「厳しい社会情勢（財政難、人材難）の状況を見据えた上で、高齢者に対するケアをどう持続維持していくか」の研究提言の3提言事業を行い、2・手

上げ事業については①「超高齢社会における社会教育」（公益財団法人社会教育協会）②「企業OBに地域社会の助け合い活動へ参加をうながすための事業」（公益財団法人さわやか福祉財団）を行

う予定。引き続き各会員と連携して事業を進めていきたい。

(玉置)



情報・調査事業

政策提言プロジェクト

学生の地域活動研究会 会議を開催

【3月5日】

当財団では、地域共生社会実現に向けたプロジェクトとして、企業・首長・地域人材・学生それぞれの地域共生社会づくりの活動参加に向けて提言を行うことを計画している。このうち学生の活動参加促進のために「ボランティア活動報告書」を活用した仕組みの提

言を検討し、研究会を開催した。研究会には大学教授や教育政策経験者、ボランティア活動実践者、企業経験者等10名が参加、文部科学省地域学習推進課長がオブザーバー参加した。

まず当財団の堀田力会長および清水肇子理事長から概要の説明があり、その後、「ボランティア活動報告書」について、特に次の5項目に関して意見を交換した。

①入学・就職の判定になぜボランティア活動の資料が必要なのか、②地域の方などにどれだけ記入してもらうか、どのような項目を立ててどこまで評価しても

らうことが現実的か、

③人間力のどのような特性について評価してもらうか、④総括地域活動報告書における総括の仕方、⑤報告書をどう活用するか。これらについて活発に意見が出され、委員の間でおおむね共通認識を持つことができた。その結果を「ボランティア活動報告書」及びその利用方法に反映し、記入要領および解説書を付して実践的な仕組みを提言する研究会報告書として公表することを予定している。

公表後は仕組みの活用に向け、大学・企業等との連携を進めたい。

(川田)

退職のお知らせ (3月31日付)

■ 事務局

中村 豊さん

中村さんは現在も続く東京都教育委員会からの第1期研修生として、かつて1年間活躍され、勤めを終えられた後、2019年より再び当財団で大阪サミットの準備、運営等事務局で頑張っていたきました。

■ 財団運営グループ

片山 順子さん

片山さんには1年間、庶務を中心に財団の運営全般を支えていただきました。

■ 自治体研修生

柚木 秀彦さん (東京都教育委員会)

柚木さんは1年間の研修期間が終了し、4月から東京都教育委員会に戻られました。当財団では、「地域助け合い基金」や近畿ブロックを担当し、地域共生社会づくり活動に取り組んでいたきました。

川田 利輝さん (神奈川県)

川田さんは1年間の研修期間が終了し、4月から神奈川県庁に戻られました。当財団では、「地域助け合い基金」や、学生を中心に地域共生社会づくり活動への参加の働きかけに取り組んでいたきました。

事務所 だより

●今年も新しい研修生、スタッフが加わり、皆さん新地域支援事業を主に担当することになった。まだまだコロナ禍なのでなかなか全国へ行くことは叶わないが、オンラインなどで皆さんにお会いすることもあるかもしれません。どうぞよろしくお願いします。

みんなの広場



投稿募集

『さあ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

本誌で取り上げたテーマへのご意見・ご感想、人生100年時代の生き方、ボランティア活動等のエピソードなどをお待ちしています！

- * 添付の投稿ハガキや投稿用箋などをどうぞ活用ください。
- * 掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8

日本女子会館7階

公益財団法人さわか福社財団

『さあ、言おう』編集部宛

FAX: (03) 5470-7755

メール: pr@sawayakazaidan.or.jp

「どうしてる？」
一人ひとりが生きることの尊さを確かめあい、お互いの願いを認めあい、長寿社会で暮らしている者同士の「共生の絆」を太くすること。屋外の「三密回避」で失った「密の価値（温かな交流）」を屋内で取りもどす。これが「不要不急の外出」自粛を求められている高齢者にできる

今、世代間の絆を
強くするとき

堀内 正範さん 82歳

千葉県



もと
元三密、新三密、
いささか過密？

「テレ＆メール新三密活動」です。「新三密」は親密・詳細・綿密など、内容はご自分が納得できるものに。コロナ感染リバウンドの今はとくに若者たちとの連携を密にすること。知事の訴えとジージからの熱いひとことが感染予防の実効力を高めるでしょう。感染には留意しながら、地域での「医療（命）」を守る活動や生活圏環境（地域共生社会）形成への参画を持続すべきときなのです。



Tsutomu Hotta

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

法人
年会費
(1口)

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

「あたたかい ことばがつなぐ こころのわ」5月5日（水・祝）～11日（火）は「児童福祉週間」です

表紙絵から

はり絵・
池田げんえい

「端午の節句」



編集後記 ●「思恩忌」春を執り行いました（表紙裏・P2～「巻頭言」）。●好評の連載「厨房男子」、理系男子の登場です（P4～）。●「真っ直ぐに、30年」、清水理事長を通して、さわやかの軌跡を丹理事が振り返りました（P12～）。●「移住 悪くないですよ」は、東北・宮城県から。人間に本来に必要な力とは何かを考えさせられます（P20～）。●5月5日から1週間は、「児童福祉週間」です。今年度の標語は、上欄の香川県・上村藍子さん（11歳）の作品です。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

大日向
雅美

若き日の私は孤独な研究者でした。

母親一人に育児を担わせる日本社会の

「母性愛神話」からの解放を訴えて、

厳しいバッシングに晒されていました。

地域の皆で子育て・子育てを支えたいと立ち上げた

NPO活動の現場に立ったのが50歳の時。

以来20年近い歳月の中で、地域の人々、

とりわけシニア世代の力が子育て支援に大きな実を結んでいます。

「支え・支えられてお互い様」の絆に

今、一番、支えられ励まされているのは私自身です。



● 恵泉女学園大学学長

NPO法人あい・ぽーとステーション代表理事
まもなく『共生社会をひらく シニア世代の子育
て支援～子育てひろば「あい・ぽーと」2004～
2021』（日本評論社）が上梓の予定です。

「あきお」 5月号

通巻333号 2021年5月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

コロナ禍を乗り越えて、
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

開催

2021年 **9月1日(水)・2日(木)**

場所

パシフィコ横浜
(横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催形式

会場参加、ライブ配信併用
会場参加 **1500名**
オンライン視聴 **3500名**

※新型コロナウイルス感染症の状況により、
全面オンライン配信とする場合があります。

主な内容

- 全体シンポジウム
- 分科会：第1部から第3部まで34分科会 ※現時点での予定です
- ポスターセッション ● 全体発表会 ● 大交流会 など

主な対象

生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、
地域支援包括センター等の地域づくり関係者、国、関係機関、NPO・民間団体の関係者等、助け合い・支え合う地域づくりに関係する方、その他
関心を持つ一般住民 など

参加費

資 料 代 **2,000円／1人** (会場参加、オンライン視聴とも)
大交流会 別途 **3,000円／1人**

5月17日
参加お申し込み
開始



ポスターセッション出展受付中

コロナ禍における助け合い活動、地域共生の活動など、
いきがい・助け合い活動に関する取り組みを
ポスターにしてご紹介ください。

**ご応募を
お待ちしております！**

※応募詳細は財団ホームページ、
または下記電話番号で「ポスターセッション担当」までお
問い合わせください。

お問い合わせ 電話：(03) 5470-7751 (担当・内田)

◎開催情報は、財団ホームページ
でもご案内しています

▶ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>